太子

潮五郎

学習研究社

書きおろし歴史小説シリーズ

聖徳太子

昭和五十三年四月二十日　初版発行

著者　海音寺潮五郎
編者　日本歴史教育研究会代表　内藤誉三郎
発行者　古岡滉
発行所　株式会社　学習研究社
東京都大田区上池台四ノ四〇ノ五
郵便番号　一四五
電話　東京七二〇局二一一一
振替　東京八一一四二九三〇
印刷　共同印刷株式会社
製本　有限会社　黒田製本所

©1978 Printed in Japan 0393-164 501-1002

＊この本に関するお問合せやミスなどがありましたら，文書は
東京都大田区上池台4丁目40番5号（〒145）学研ユーザー・
サービス部「書きおろし歴史小説シリーズ」係へ，
電話は東京（03）720－1111へお願いします。
＊本書内容の無断複写を禁じます。

目

次

聖徳太子誕生……7
仏と神……16
野心と欲情……37
天下大乱……62
殺し屋・東漢ノ駒……99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

神かくし……133
摂政太子……165
日出づる国……203
対談解説　海音寺潮五郎／尾崎秀樹　245

聖徳太子

装幀　栃折久美子
装画　御正　伸
挿絵　御正　伸

聖徳太子誕生

飛鳥(あすか)は奈良盆地の東南隅、盆地がつきて山にかかるあたりである。山々の間をうねりながら流れて来る飛鳥川が、何千年という長い年月の間に山々をけずって平地をつくり、山々の間に複雑な形で入りくんでいるあたりから、盆地の東南隅にかけての地域が、飛鳥と呼ばれているのである。

この地方の、飛鳥川の右岸、小高い丘に寄った位置、今の橘寺(たちばなでら)に、欽明(きんめい)天皇の皇女間人(はしひと)の邸宅があった。皇女はやはり欽明の皇子である橘豊日尊(たちばなのとよひのみこと)の妃(きさき)であった。この時代は同母の兄妹の結婚はタブーとされていたが、母親のちがう兄妹の結婚はむしろ望ましいものとされていたのである。

もう一つことわっておかなければならないのは、この時代は夫婦が同じ家に住むのは、一般庶

民にはよくあることであったが、上流階級ではごく違例なことで、妻は妻の家に住み、夫は夫の家に住んでいて、夫は妻の家に通って行くのが普通であったことである。だから、間人皇女も、この当時の習慣によって、橘豊日とは別居していたのである。

西暦では五七三年、敏達天皇の二年正月元日。

妃は新年の儀式のために邸内を巡行した。この時代の日本人には、山にも、木にも、石にも、建物にも、あらゆるものに精霊があるという信仰があったので、その精霊たちに新年のあいさつをし、新しい年の幸運をいのるのは、家の主人たるもののしなければならない儀式になっていたのである。

妃は妊娠中で、しかも臨月を二月も過ぎていたのだが、侍女らにたすけられて、ゆっくりと邸内をまわった。

妃はまだ若い。二十前である。当代無双といわれるくらい美しい人でもあった。妊娠中ではあるが、その美しさは少しもそこなわれず、落ちつきが添って、さらに美しくなっていた。

つぎつぎに建物をまわって、厩舎の前に来て幣をふって祈りをささげている時、にわかに産気づいたかと思うと、やすやすと男の子を生んだ。

子供は厩舎の戸口で生まれたというので、厩戸王子と名づけられた。厩戸は十二の時、父君が皇位につかれるので、以後は皇子であるが、それ以前は王子というのが正しい。これが後の聖徳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

太子である。

近頃の学者の中には、聖徳太子が厩舎の戸口で生まれたというのは、イエスが厩舎で生まれたという伝説と関係があると言っている人がある。ネストリュー派のキリスト教は、六朝時代（三～六世紀）に中国に伝わり、景教あるいは十字教という名でひろく信仰されていたから、イエスの生誕伝説も中国では知られていたので、これが日本に伝来して、聖徳太子の生誕伝説に付会されたというのである。

しかし、ぼくはこの説を無条件には信じない。イエスが聖者であることが一般に知られている国なら、厩舎で生まれたということはプラスになりもしようが、誰一人として知る者のない日本でこの伝説を付会するのは無意味であるからだ。聖徳太子の厩舎生誕説は事実をそのままに伝えたものと考えた方がすなおである。

しかし、ある条件をつければ、この説の成り立つ可能性はある。

その条件とは？

この時代よりはるか以前、日本に帰化した異民族で秦氏というのがいる。これは秦の始皇帝の子孫であると言い立てて日本に渡って来て、優秀な機織の技術を持っていたので、「秦」という字を書いて「ハタ」とよんで、これを氏の名としたということになっている。

ところが、近頃の学者の中で、秦氏は中国系の民族ではなく、元来はユダヤ系統の民族である

と言っている人がある。中国では、隋以前には、東ローマ帝国の版図の中で、ヨーロッパにある以外の部分は大秦と呼んでいた。現在エルサレムのあるあたり、つまり昔のユダヤのあったあたりは、大秦の一部分であったことは間違いない。源を大秦に発する民族だから秦といったという説は、ある程度の理由はあるのだ。

現在、京都に太秦というところがある。ここには秦氏の氏寺であった広隆寺がある。この寺は一名を太秦寺という。大と太とは違った文字であるが、「丶」があるかないかだけの違いではあり、意味もよく似ている。秦氏らは先祖の地である大秦を忘れないために、太秦寺という名をつけたと考えられないことはない。

もし秦氏が大秦から来た民族であるなら、イエスの生誕伝説も知っていたはずであり、イエスが聖者であることも知っていたはずである。

だから、もし聖徳太子の厩舎生誕伝説がイエス伝説が付会されて出来たものなら、それは秦氏が言い出したに違いない。

しかし、これはあくまでも、秦氏は中国史でいう大秦地方から来た民族であることを信じた上で言えることで、それを信じないなら、成り立つ説ではない。

さて、間人皇女につきそっていた侍女らはおどろきあわてて、母子を本殿の寝室にうつして介抱したところ、母子ともに何のさわりもなく、至って安泰であった。

伝説では、西方からさし入る赤黄の光が王子の殿内にしばしとどまって消えなかったとか、敏達天皇が見舞いに来られて群臣に命じて王子に湯をつかわせ、みずからむつきを着せて抱き、皇后から橘豊日、さらに間人皇女に順々に手渡しされたところ、いずれもふくいくたる芳香が身にしみついたので、天皇は感嘆して、

「この子は将来かならず世にすぐれた者になるであろう」

と仰せられたとか、いろいろ伝えるが、こういう伝説は聖者の生い立ちには共通なことで、どこまで信じてよいかわからない。しかし、美しく、またすこやかな嬰児であったことは間違いないであろう。

厩戸王子は最もかしこい少年で、五歳の時に学問に興味をしめし、六歳の時には仏教に興味をしめしたと、伝説されている。

賢哲の成人伝説にすぎないと言ってしまえばそれまでのことだが、これに似たことはたとえば江戸時代の学者山鹿素行の生い立ちにも、たとえば維新時代の橋本左内や吉田松陰の生い立ちにもあることだから、多少の誇張はあっても信じてよいであろう。天才は天才として、信仰的に見る必要がある。凡人の心をもっておしはかっては、天才の天才たるところを見失ってしまう恐れがある。

ともあれ、厩戸王子は最もかしこい少年として生い立って行ったのであるが、その生い立ちの

期間は、日本歴史の上で最も重大な時期の一つであるから、一応の説明をする必要がある。

その一つは、日本が国家としてまだ完全な形態をそなえていなかったことである。日本の国のおこりは、最近の歴史学者の説によると、現在の奈良県——昔の大和地方とその付近の豪族らが連合して一つの政権をつくり、これを母胎にして、長い年月の間に日本の各地を征服したり、招撫したりして、一応の国家の形をつくったというのである。

古代史に伝える四道将軍や日本武尊の話も、特定の個人の話ではなく、長い年代の間に大和から地方の征伐にむかった幾人もの人の話が、四道将軍や日本武尊に集約されたのであると、歴史学者らは言うが、たしかにそれはそうに違いない。あの狭小な奈良県地方の勢力が、短時日で全国を征服統一することが出来るはずがない。

この物語の時代、東は関東地方まで、北は今の新潟県の中部あたりまで、南は九州の南端まで、大和政権の威令に服して、一応国家の形にはなっていたが、その国家としての内容は、現代の人の考える国家とは大分ちがっていた。

すべて国家には、立法、司法、行政、軍事、警察、経済等の権力があるべきものだ。これは現代の国家も同じであるが、古代にはこのほかに宗教も最も大事なことにされていた。

ところで、この時代の日本においては、連合政権が共同してつかさどっていたのは祭祀(宗教)と軍事だけで、他のことは連合政権を組織している各豪族——蘇我、物部、大伴、中臣、葛城、

平群等々がそれぞれに持っていた。そのはずである。各家はそれぞれに土地と人民とを私有していたのであるから、その点では各家がそれぞれに国家のようなものであったのだ。その家の行政のやり方、その家の法律があって、それでこれを治めるのだ。この土地人民は生産するが、それはその家の収入になるのだ。

つまり、当時の日本は、豪族という独立国が寄り合って大和政権をつくり、軍事と宗教行事だけを共同でやって、あとは各家の自由という形であったのだ。

ここで宗教ということばが出て来たが、この宗教はもちろん日本固有の天神地祇の信仰とその祭祀だ。これもある程度は各家それぞれにやっていたが、共同している分も多かった。たとえば豊年のいのり、新穀収穫の感謝祭、虫害・風水害・干害回避のいのり、戦勝祈念等がそれだ。この祭司は世襲となったが、そのはじめは各豪族の中で最も繁栄した家の当主が任ぜられたろう。そのような家は作物もよく出来、部曲の民もよく働いて生産力が高いのであるから、当主にはよほど霊妙な呪術力があると思われたわけだ。

いつか、これが世襲となって、その家がらがきまり、当主は最も尊貴なものとされ、豪族らの共主となって、「大君」という名で仰がれるようになった。

「これが天皇家のはじまりである」

と、今の学者らは説くのである。

日本で、政治のことを「まつりごと」というのは、政治と祭事が一体のものであったこと——少くとも祭事が政治の最も重要な部分を占めていたことを示すのである。今日でも、天皇は毎日のように賢所に出られて、その祭りの数は実に多いという。

大君（天皇）は最も尊貴なものとされ、相当大きな権力を持ってはいた。民のある者に氏の名をあたえたり、カバネ（階級と世襲職を示すもの）を授けたり、豪族らの民をある程度使役したりする等の権力がそれであった。しかし、前に書いたような国の組織であったので、主権というほどのものはなく、大事なことはすべて豪族らの会議によって決せられた。

豪族らの勢力は時代によって消長があるから、特別に勢力の大きくなった豪族の意志が会議を支配することは言うまでもない。日本の国はそのはじまりから天皇家が絶対権力の君主であったという立前で書かれている古事記や日本書紀にすら、そういう大勢力を持っていた、豪族の名前が出て来る。顕宗・仁賢両帝の時代の平群真鳥がそうであり、これから出て来る蘇我蝦夷と入鹿がそうである。

要するに、天皇権はまだ稚くて弱く、ややもすれば強大な力をもつ豪族に圧迫されがちであったのである。

以上が当時の日本の国家組織であり、天皇と日本との関係であるが、当時の日本が国家としてまだ未成熟な状態であったことを、承知していただきたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.